

【イラン事情】

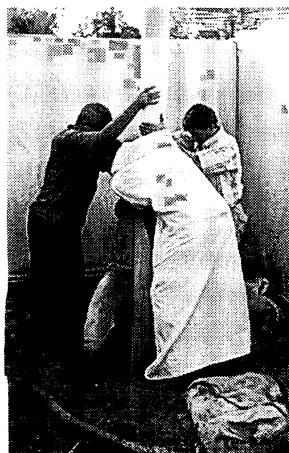
# バグダッドに井戸を掘る

細井 明美

湾岸戦争当時、米政府はイラクのライプラインを徹底的にたたき、サダム政権が内側から崩壊するのを待っていたという。

しかし、フセインは彼流の指導力を發揮して4カ月で復旧させ、その後の国連経済封鎖にも我慢強く耐えた。思惑のはずれた米政府はイラク侵略を達成するためにそれから10年の歳月を待たなければならなかった。

03年3月20日、イラクへの攻撃（衝撃と畏怖作戦）は、湾岸戦争時と異なり、のちのち自分たちが占領するときのリスクを考え発電所・浄水場などへの攻撃をいっさい行なわなかった。浄水場には世界中から集まった「人間の盾」が待機して



土の中にパイプを通す作業

いたが、彼らは無傷で故国へ戻ることになった。

思えば03年はまだ平和だった（と私はよく言い合う）。このとき、亡命イラク人たちが次々と帰国して暫定政権づくりを始めた。今思えば彼らの企みにもっと早く気付くべきだったのかもしれない。ドーラの発電所には4本の煙突があるが、03年当時煙が出ていたのはいつも1本だけ。電気は来たり来なかったり繰り返り返す。バグダッドの友人の家では、発電機の電力は冷蔵庫のためにとっておくからランプの灯りでシャワーを浴びる。家族が真っ暗闇の中で生活している。2年たってもその生活は変わらない。いや、ますますひどくなっているようだ（ライプライン復旧の予算は治安維持のために費やされている）。

05年6月、送水管の爆破によりバグダッドの街が汚水に満たされた。汎アラブ主義新聞「クドス・プレス」によると、『汚染された水のために、毎月1万人の患者が腸チフスや肝臓への感染症を含むさまざまな病気にかかり、特に子どもをはじめとする住民は深刻な脅威につつまれている。』

水道の飲料水汚染が引き起こされたのは、飲料用下水道と下水道のパイプが、12年間におよぶアメリカの経済封鎖と米軍の爆撃で破壊されたという事実によるものである。

バグダッド市内にあるメディカル・シティーの病院では、多くのベッドがディヤラ橋一带とマダイン地区、ザファラニヤ地区、サドル・シテイ、その他の貧困地区に住むイラク人で埋められている。汚染された水を飲んだ結果、全員が最初は肝臓を悪くし、ひどい下痢に苦しめられた。ディヤラ橋地区に住んでいた患者の1人であるムハンマド・ワリは、「長いこと深刻な水不足になった。水を手に入れても、ひじょうに不快な臭いがした。だが私たちは、それが下水で汚染されていたとは知らなかった。2人の弟と私が毒にあたり、高齢の父親も一緒だ」。

汚染された水の問題は多くのイラク人の知るところとなり、彼らは病気にかからないようにボトル入りの飲料水を買うようになったものの、過去には水道水が完全に飲み水に適していたこの都市の住民にとつては新しいできごとだった。しかしボトル入りの水の需要が急増したことで、その価格も急騰することになった。』

7月中旬、アルタルミア浄水場と発電

所(浄水場のポンプに電気を送る)が何者かに爆破され、今度はバグダッドの街半分が渇水状態となった。かつて街のレストランではどこでも冷たい水があり、家々を訪れると冷たい水でもてなしてくれた。暑い夏はそれが最高のご馳走だった。チグリス・ユーフラテス河にはさまれたイラクでは、水に不自由することなどほとんどなかったに違いない(2年間の占領のぞいで)。しかもバグダッドでは上・下水道も完備していたから余計に悲惨だった。

8月になれば毎日50度を越える日が来る。私はすぐさまバグダッドに住む友人に水の支援を相談した。最初に浄水場から水を給水車で運ぶ方法を考えたが、下見に行った友人から米軍の警備が厳しくとても近づけないとの返事をもらう。では、どうしたらよいのか? 悩んで



上・汚水にあふれたバグダッドの街。下・堀に出  
来た井戸の蛇口。

いると彼から「バグダッドに井戸を掘ろう」というメールが来た。私は半信半疑だった。バグダッドで井戸を掘る? 確かに彼の家には井戸があったけれど……。ちなみにその予算は1万2千ドル。

すでに10日間水がこない地域もあり、子どもをはじめ体力の弱った老人にとつては切実な問題になっていた。とりあえず井戸を掘り、緊急処置としてミネラルウォーターを購入・配布することを考えた。急を要することなので、資金を高遠菜穂子さんと私のNGOから出すことにした(彼女はこの案をすぐに賛成してくれた)。しかし自衛隊批判にもつながるこの活動で高遠さんが再びバッシングを受けることがあってはいけなさと考え、彼女の名前を目立たせないような工夫をした。すなわちさまざまイラク関係者にメールを送り、出来るだけ多くの人に呼びかけ人として参加してもらった。結局、9団体57個人が呼びかけ人となつてくれた。

さらに、井戸を掘るにあたってはバグダッドに落ちた劣化ウランの影響も問題になった。ウランに汚染された水が出ることはないだろうか? 劣化ウランを研究するNGOにこのことを相談した結果、「まったく問題がないとは言えない。しかし、ウランが溶ける時間が遅いので深く掘ればあるいは大丈夫なのではないか、

断定は出来ないが……」ということであった。

苦しいことではあるが、どんな水でも、ないよりましだということ。「井戸を掘る」——それを私たちは簡単に決定したのではない。結局、井戸は水道が復旧するまでの緊急の対策と位置づけた。しかし、水道水そのものも濁ったチグリス川から取水しているため戦前にくらべて質が低下しているのも事実だが。

こうして始まった支援は「イラク『命』の水支援プロジェクト」と名づけられ、1カ月で全国から5百万円の寄付が集まった。

一方、イラクでは知人の家の庭に井戸を掘る作業を進めていた。庭に掘れば秘密裡に作業が出来るということと、他人の井戸へ水をもらいに行くことは一般的なことから誰にも怪しまれないと友人は判断したらしい。まず井戸専門の機械で穴を掘り、ある程度掘ったところから手掘りになるといふ。土を掘っていくと黒い層にぶつかるが、それをさらに掘るときれいな水が出るのだそう。1週間くらいで期待していた水が出た。およそ16メートルの深さ。水が出た時点で水質検査に出した(バクテリア・重金属の検査に合格)。ところで、この井戸掘作業が人々の耳に入り、近所の人々がボランティアで手伝い始めた。おかげで1つの井戸

の予算で2カ所掘ることが出来た。後で知ったことだがフセイン政権下では町のコーナーごとに井戸があつたらしい。だから井戸掘専門の会社があつたのだ。

渇水状態が特にひどかつたのはバグダッドの西、ハイ・アル・アメル、アル・バヤーヤ、アル・シュハダ、アル・ドーラ、アル・シュルタの4ヶ所だったが、井戸は、ハイ・アル・アメルとアル・シュハダに掘つた。ひとつの井戸から1時間に千2百リットルの水が出て、5百家族が使える。モーターを日本製にしたため水が非常によく出た（日本製は品質の良さで評判が高い）。

最初日本人が支援していることを隠していたが、人びとが重宝に使い始めたのを見て、友人は公表した。それを知ると多くの人が「日本人は近隣のイスラム教徒よりずっと良いムスリムだ」と言ったという。

バグダッドで井戸を掘ってから2週間あまりの9月8日、モスルの西60キロの町、タルアファルで米軍とイラク軍の掃討作戦が始まった。タルアファルは人口30万、スンニ派アラブ人とトルクメニスタン（トルコ系）が住む町。ちょうどモスルの親戚（いとこ）が米軍の銃撃を受け数日後に亡くなるを訪れていた友人からタルアファルへ水を送りたいというメールをもたう。攻撃が始まってまもなくのことだ

から、どこのNGOもまだ支援に入っていないなかつた。そこで、すぐに資金の一部からミネラルウォーター7千本を購入、タルアファルの難民キャンプへ届けることにした。

イラク警察が嚴重に警備する検問をいくつも通過したのち、着いたキャンプではイラク保健省が食べ物および飲み物をすべて管理し、難民に均等に配つていたという。トルクメニスタンが多数住んでいるということもあり、この掃討作戦に対してトルコ政府が米国に対して抗議を行なつた。友人の証言によれば支援物資もトルコ政府からたくさん来ていたという。ファルージャ攻撃のときと較べ、対応の違うトルコ政府に対して納得がいかない友人はしばしば不満を言っていた。

確かに04年11月多くのバグダッド市民がファルージャ難民をそれぞれの家に受け入れていたが、近隣のアラブ諸国からの支援はなかつた。友人の家にもファルージャ難民家族が滞在していた。

今、イラクは連邦制に向けてどんどん変化をしている。バグダッドのサドル・シテイではシリア派の妻を持ったスンニ派の男性が多数殺され、恐ろしくなつたスンニ派の人びとはスンニ派住民が住む町へ移動を始めている。さらにマフディ軍（サドルの軍隊）はIDカードを発行し、それを持たないものは町に入れない状態

で、さながらサドル国となつている。戦前には宗教の違いはそれほど大きな問題ではなかつたのに、このところ宗教による境界線が出来つつある。

誰もがスンニ派への特別な攻撃を感じている。スンニ派住民が転居した家にイラン人が移り住んでいるという。友人がある家を訪れたらペルシヤ語しか話せない子どもが留守番をしていた。

イラン人の移動は南部でさらに激しく、バスラに住むある医者は「警察官がイランにいる家族を迎えにくくするために休暇を取りたいので診断書を書いてほしいと言つてきた」と証言している。

穏健なシリア派、キリスト教徒、スンニ派の人々が取り残されたまま、イラクは連邦制に変わりつつある。このような状況下で、井戸はあと4つ掘る予定だ。

どんな政治状況であろうと人びとはそこで生き、日々の暮らしは変わることなく続いていく。自分で井戸まで来る事が出来ない人に代わって水運びをしている子どもたちがいる。わずかながら収入を得ているという。少しずつではあるがイラク経済が動くような支援をしていければと思う。それが彼らにとって生きる希望につながるのだから。

（ほそい・あけみ、「イラク『命の水』支援プロジェクト」、本会会員）